九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ラーヴァーター観相学の独自性とその批判

橋本，佳奈

https://doi.org/10.15017/3053981

出版情報：九州ドイツ文学. 33, pp.1-13, 2019-10-30. 九州大学独文学会
バージョン：
権利関係：

ラーヴァーター観相学の独自性とその批判

橋　本　佳　奈

はじめに

ある人間の相貌からその内面を読み取ることは可能か── 可能だとすれば、それはどのようにしてか── いやそもそも、人間の身体的特徴に個体の精神性の表出をみとめようとすること自体、妥当であるのか否か。18世紀後半、ゲーテやヘルダーをはじめ、リヒテンベルクやムゼーウスといった錚々たる面々を巻き込んだ観相学論争の発端に位置するのは、周知のとおり、ヨーハン・カスパー・ラーヴァーター（Johann Caspar Lavater, 1741-1801）が1775年から1778年にかけて出版した四巻の『観相学断章── 人間知と人間愛の促進のために（*Physiognomische Fragmente, zur Beförderung der Menschenkenntniß und Menschenliebe*）』[1]（以下、『観相学断章』）である。おびただしい断章的な観察と考察からなるこの大著を通してラーヴァーターが提唱した観相学[2]は、その一貫した分析方法によって、それまでの観相学とは一線を画している。[3] ラーヴァーター観相学の特徴ともいうべきその分析方法とはつまり、一時的感情の一切が排除された顔を対象とする、というものだった。ラーヴァーターは、一過的な感情がすべて抽象された顔においてはじめて魂の真の状態が示される、と考えたのである。ラーヴァーターの観相学的分析におけるシルエットの多用はそのことを物語っている。横顔の輪郭のみを模写するこの手法によっては、表情の変化を読み取ることはできない── というよりむしろ、相貌における感情の表出に煩わされずにすむ。[4]

こうした発想に基づくラーヴァーター観相学にはすでに発行当初から賛否両論が沸き起こったのであるが[5]、なかでも批判的立場をとった代表人物として知られるのがゲオルク・クリストフ・リヒテンベルク（Georg Christoph Lichtenberg, 1742-1799）である。もうひとり、独自の視点からラーヴァーターに批判を加えた人物として、ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス（Johann Karl August Musäus, 1735-1787）の名をあげねばならない。啓蒙期の代表的な風刺作家として知られるムゼーウスは、1778年から翌年にかけて発表した小説『観相学的紀行：前録観相学的日誌（*Physiognomische Reisen : voran ein physiognomisch Tagebuch*）』（以下、『観相学的紀行』）において、ラーヴァーター観相学のはらむ問題点を、独自のイロニーとともに浮き彫りにしてみせた。[6]

本稿は、リヒテンベルクとムゼーウスという二人の同時代者の視点に立って、ラーヴァーター観相学が抱える種々の問題点をあらためて検証する。と同時に、ラーヴァーター観相学がそうした否定的側面を通して何らかの積極的な意義を指し示していたとしたら、それはいかなるものであったのかを考察してみたい。

第１章 「観相学」への二つの批判――「情相学」と「基礎人相」

ここでは、リヒテンベルクとムゼーウスの両者が、ラーヴァーターの「観相学」に抗ってそれぞれに提示した概念に着目し、その意義について考察してみよう。

リヒテンベルクは、『観相学について、諸観相学者に反して――人間愛と人間知の促進のために』（1778年）において、ラーヴァーター流の「観相学」を越えるものとして――その意味で本書のタイトル「観相学について／を越えて（über）」は示唆的と言ってよい――「情相学（Pathognomik）」を提唱した。リヒテンベルクによれば、「人間の身体における外側の部分、とりわけ顔の外形や性質から、心の動きのあらゆる一時的な印を排除して、精神や魂の性質を探し出す」のが観相学の技法である一方、「情相学」は、「情動の記号学全体あるいは心の動きの自然な徴の知識」に基づくものであり、そのようなものとして、「心の動きの自然な徴」をその「あらゆる漸次的移行や混合」のままに捉えようとする。[7] こうした情相学的観点からすれば、表情筋のあらゆる動きはそのまま魂の動きと連関するばかりか、動的な表情こそが人間の内的魂の現れとみなされ、その解読に際しての重要な要素となるのである。だが言うまでもなく、ラーヴァーターにとっては、相貌の静的で固定的な部位こそがその人物本来の魂や性質を表すものとされた。そうした発想に対してリヒテンベルクは次のように指摘する。

> 不変不動の諸部分、とりわけ骨の形は、欺くものである。一つには、改善余地のある被造物の場合、不変不動の諸部分が完全に堅固になった後でも、改善余地がずっと長くあり続けるので、改善がたとえどんなものであっても、なおも新たに骨の形が生じてくるからである。そして第二に、諸部分の形状がほとんど私たちの意志に左右されないゆえに、外的要因による影響も不可避であり、その継続をどんな技術をもってしても食い止めることのできないただ一つの圧迫や突きは、次第に諸変化を起こすことができるからである。[8]

「固定的な部分」、この場合とりわけ骨相は、人間の純粋にして不変な魂の状態を伝えるものではありえない。なぜなら一見「不変不動」に思われる骨格そのものが、現実にはたえず変化のうちにあるからだ。だから一過的な表情を相貌から取り去ったとしても、残された「不変不動の諸部分」が変化することは十分にありうる。ということは、顔から感情を排除しさえすれば魂の状態が読み取れると思い込んでいる限り、ラーヴァーターの観相学は「欺」かれることになる。

それに対し、「心の動きの自然な徴」として表情を重視する「情相学」の場合はどうだろうか。その優位性を、リヒテンベルクは次のようにまとめている。

> ［……］ある一つの顔における情相学的変化は目にとっての言語であり、偉大な生理学者が言うように、その言語だと嘘がつけないのである。［……］動かせる部分や、運動

における様々な結果というのは、固定的な部分や結果を通して与えられた定理から出た添え物などではない。それは必要不可欠な条件であって、それがないとなると、解答が常に定まらぬままになってしまう。[9)]

リヒテンベルクによれば、固定的で不変的と見なされる身体部位以上に、表情変化は重要な「言語」である。この言語は単に偶然的で一過的な「添え物」ではなく、むしろ人間の内面を読解するための「必要不可欠な条件」でさえある。表情は魂の動きと密接に連関しているため、偽ることが出来ない。魂が本来的に動的であるのと同様、それと連動する表情もまた動的なのである。このリヒテンベルクの論述からは、観相学は固定的な部分に固執するあまりに、結局魂やその人の本質に触れることができていない、という批判が読み取れる。

こうしてリヒテンベルクがラーヴァーター観相学をいわば正面から批判し、それを乗り越えるべき新たな学を提示しようとしたのに対し、ムゼーウスの立場はそのイローニッシュな性格によって際立っている。それを物語るのが、ムゼーウスの持ち出す「基礎人相(Grundphysiognomie)」なる概念だ。ラーヴァーター観相学における相貌の純粋性、すなわち感情的な表出一切の抽象への要請を、いわば大仰かつ極端に拡大解釈したところで行き着くのが、この「基礎人相」なのである。この概念について詳らかにされるのは、語り手の「私」── なお、この人物は観相学の専門家をもって自任している ── が隣人の子供の洗礼に招かれたときのことを回想する場面である。

［……］私たちの教会の信仰人相を現在と、200年前に遡って数えて、詳しく観察すると、双方の間には、ランボルト船長と彼の生まれたばかりの子供との間にあるほどの類似しか見つけられない。しかしランボルト船長の子供を長く観察した後、私はついに基礎人相を発見した。そしてそういったものを観察することは非常に幸運なことで、私が金星の衛星を恒星の中に見つけることがあったとしても、それ以上に私を喜ばせたのだった。
［……］その小さな腕白小僧は赤茶色になって泣き叫んで、そうやって自分の基礎人相を歪めてしまったので、そのあとはオランダ人船長よりも、明らかにオナガザルに似ているように見えた。[10)]

ここで「ついに〔…〕発見した」と称する「基礎人相」は、誕生した間際の赤ん坊の顔にのみ見られるものであって、当の赤ん坊が泣き始める刹那、それは瞬時にして失われてしまう。いまだ外的な影響をまったく知らない限りにおいて、赤ん坊の魂は純粋な状態にある。その限りにおいて、泣き声のために相貌をゆがめることはない。だがわずかな瞬間に赤ん坊は何らかの不快の感情に駆られ、泣き叫ぶ。外的刺激によるなんらかの感情の惹起は、魂の状態と連動する。こうして魂は純粋状態を脱し、その変化によって顔には皺が寄り、「基礎人相」は永遠に失われるかに見えるのだが、しかし、── ここで「私」はさら

に反問する――、こうした純粋な相貌が仮にふたたび回復するときがあるとしたら、それは個体の死後においてではなかろうか。

> 今私はどうしても知りたくてたまらないのだ、基礎人相が死後に再び現れるということも正しいのかどうかを。その子供は弱々しく、もし神様が今日か明日には我が教子をお召しになられたならば、私にすぐに伝えるようにと言い残しておいた。[……][11)]

魂が外的影響を一切こうむらない純粋状態においてのみ「基礎人相」が可能だとしたら、それは生が始まる直前、でなければ直後において現れるものであろう。ひるがえって言えば、生のうちなる人間の相貌が一種の初期状態としての「基礎人相」を示すことは絶対にありえない。ところでラーヴァーター観相学の目指すのが人間の生の有様を読み解くことであるとすれば、その分析方法の極北ともいうべき「基礎人相」は、そもそも生の状態を対象外とする限りにおいて、それ自体矛盾したものとならざるをえない。端的に、ナンセンスなのである。このように、批判対象がしたがう理念を極端なまでに忠実にすすめることで、かえってその当該理念を自己矛盾に陥らせるのがイロニーの典型的な手法だとすれば、こうしたイロニーを通してムゼーウスは、一切の感情を抽象したシルエットを分析するラーヴァーター観相学のナンセンスな性格を暴いて見せたと言えるだろう。

以上のように、リヒテンベルクとムゼーウスによる観相学批判は、そのアプローチこそ違え、ラーヴァーターの理念のはらむ同一の問題性を指し示していることがわかる。それは、感情と表情との動的な連関を排除してしまう限り、人間の内的生命や内的傾向を把握することは不可能ではないのか――そうした問題である。

第２章　美しい顔と美しい心

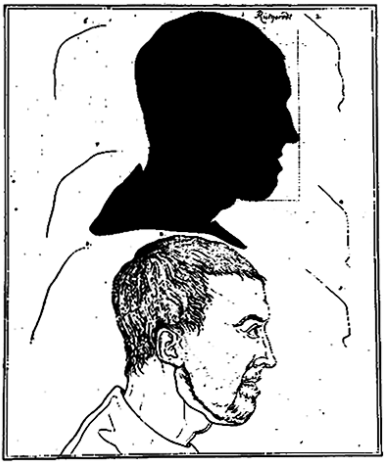
両者によるラーヴァーター観相学への批判のなかで、特に具体的な論点としてあげられるべきは、容姿の美醜と魂の善悪との関連という問題である。「道徳的な美と身体的な美の調和（Harmonie der moralischen und körperlichen Schönheit）」[12)] と題した『観相学断章』中の一節（第12章）において、ラーヴァーターは「美徳はより美しくし、悪徳は醜くする」[13)] というテーゼをかかげる。もちろんここで問題となっているのは、肉体や相貌の美醜である。外見の美醜を左右するのは美徳や悪徳だけではないと留保しつつも、容姿の美と美徳、醜悪な外見と悪徳には密接な関係があるというのが当該の章全体の主張とみてよい。

この考えには、人間と神との関係が深く根ざしている。すなわちラーヴァーターは、『観相学断章』第１章「導入」[14)] において、神は自らに似せて人間を作ったといういわゆるイマーゴ・デイの伝統に自らの学説を連ねることによって、人間の容姿は神に似て美しいものである、という前提条件を示している。そして問題の第12章の後半部において、「人間の顔と人間の体つきの美しさを備えた神は、やはりある非常に高尚な力を人間の魂に注ぎ込んだのだ！」[15)] と述べることで、ラーヴァーターは一種の性善説の立場を鮮明にうちだ

す。「人間の魂」もまた神の力によって、神と同様に美しく、ということは少なくともその初期状態においては「善」として作られていたのである。端的に、ラーヴァーターの思考を支配しているのは、神の似姿たる人間はその肉体も魂も美しい、という一種神学的な要請なのである。

ここで、先述の「美徳はより美しくする」という命題を振りかえってみよう。ここでは美的な肉体と、同じく美的な魂との相乗効果がうたわれている。肉体も魂も、その初期状態においては神と同様に美しい。だが美徳がいっそう高まるならば、魂もまたより美しくなり、それに応じて肉体も美しさをますことが期待されているのである。

一方悪徳は、初期の美しい状態を歪めて醜くする。ラーヴァーターが観相学的に分析した人物のなかで、最も悪徳と評したのはリュートゲロット（Rüdgerodt）と呼ばれる人物である。このリュートゲロットについてまとめられた断章には以下のような内容が記されており、下図１[16]のシルエットとスケッチが添えられている。



【図１】

それは：「最大級の、独創的な原始的天才。同時に滑稽で意地悪な機知に富む。」――

そしてその訂正：「人でなしの人相、根っからの『悪魔』の人相。」

白状すると、２番目のスケッチを見る前、ただの横顔の影絵においては、私はこの最高度の悪魔性に気付いていなかった。――その輪郭を見た途端、私は後退った。恐ろしい人でなしにふさわしく十分不快なあの容姿を前にして、誰が私と一緒に後退らないというのか？

恐ろしい人でなし！その通りだ！やつは類例のない本性の持ち主なのだ！生きている悪魔！絶え間なく人を殺し続ける殺人者！ひっそりと自分の中に押し込んだ悪意に満ちている！節度のない姦通者で、何の必要もなく盗みを働く泥棒、少女殺し、婦女殺し、母親殺し。どんな道徳主義者にも想像がつかず、どんな俳優も演じず、どんな詩人も詩にすることのなかった守銭奴、――その守銭奴は晩年水だけを飲んでワインを飲まない――吝嗇故に――。[……]

これら全ては、絵では一部だが、生きている顔では完全に読み取られ得る。彼の目は何も注視せず、何にも関与せず、あちらこちらへ震えて、自分の窃盗という冥府を見つめ、撲殺された者たちの中でつばを吐いた。彼の口は開いた墓穴のようで、彼の恐ろしい歯は地獄の門であった。[17]

この記述は断章のほんの一部に過ぎないが、リュートゲロットに対して、ラーヴァーターがいかに強い嫌悪感を抱いていたかは明らかである。リュートゲロットはドイツ語圏の男性であり、殺人や窃盗、姦通などいくつかの罪を犯した人物である。つまりリュートゲロットとは、犯罪という悪徳によって魂が歪められた人間なのだ。ラーヴァーターの考えに倣うと、その魂の歪みは顔や体つきに現れており、観相学的に分析するために一時的な感情を全て取り払った顔から読み取れるものであるはずだ。よってラーヴァーターが感情のない顔を分析する際に最も信頼できる手段として用いたシルエットからも、その歪み、即ち悪徳は見て取ることができよう。ところがラーヴァーターは、「白状」している通り、シルエットからはリュートゲロットが持つ魂の歪みを読み取ることはできず、スケッチを見て初めてその「悪魔性」を認める。シルエットではなく、スケッチによって分析の対象がリュートゲロットであることに気付いたラーヴァーターは、判定を恣意的に悪いものへと「訂正」したのである。リュートゲロットは罪人であるという所与の情報が判定の訂正に大きく影響したことは間違いない。この例では、悪徳による魂の歪みをシルエットから見て取れなかったことから「シルエットに魂の状態が現れる」というラーヴァーター観相学の前提が守られていない上に、肉体的な醜悪さと道徳的な醜悪さは一致するという命題の欠陥が示されている。「醜悪」という負の一致の破綻は、「善美」という正の一致に疑念を生じさせる一端ともなっている。

身体の美醜と精神の美醜が一致するというラーヴァーターに対して、リヒテンベルクは、肉体の欲求と魂とのあいだに一種の対立関係を見出す。肉体の欲求とは言わば「俗」であり、魂は「高尚」なものであるから、それらは敵対するものであって、調和するものではないと考えたのである。続けてリヒテンベルクは「精神に関して、肉体が審判者であるというのか？」[18] と疑念を述べ、「肉体」が精神に影響を及ぼし得るというラーヴァーター観相学の考えを強く否定している。ここから考えられうる、ラーヴァーターとリヒテンベルクの認識のずれの原因は、肉体に関する考え方の違いである。ラーヴァーターは精神と肉体を同等に高尚なものとみなしていた。それは人間が神の似姿であるという考え方に由来している。それに対してリヒテンベルクは、精神に比べて肉体は卑しいものと考えていた。この大きな相違によって、ラーヴァーターとリヒテンベルクの考え方は相容れないものとなっている。

対してムゼーウスは身体の美醜と精神の美醜の調和に関して、リュートゲロットの判例を引き合いに出し、観相学に批判的な登場人物フィリップの台詞を通して否定的な立場を示している。『観相学的紀行』の主人公である「私」は羊飼いのマルクスを解雇したのだが、解雇の理由はラーヴァーター観相学で「悪魔の人相」の持ち主と称されたリュートゲロットのシルエットと羊飼いマルクスのシルエットが相似していたことである。観相学を根拠に「私」がマルクスを犯罪者の素質を持つとみなしたことに対し、「私」の忠実な家来でもありマルクスの友人でもあるフィリップは、マルクスを「私」よりもよく理解しているという自負から、解雇理由の不当性を訴えた。しかしそれでもフィリップの訴えを認めず、解雇という決定を取り下げようとしない「私」に対し、フィリップはリュートゲロッ

トに言及しながら次のように反論した。

> フィリップ「問題がどういうことなのかはよく分かっています。それはまたしても内から外へということでもあり、外から内へということでもあります。それを理解しようとする紳士の方々は、リュートゲロットの悪魔的性格から彼の顔を解釈しました。それは内から外へということです。そしてリュートゲロットに似ているらしいという理由から、彼らはマルクスの顔を悪魔的性格へと意味づけます。それは外から内へということです。しかし言わせてもらいますと、ご主人様、それは本当に正しくありません。それは思い違い、誤謬、それ以上の何物でもないのです。」[19)]

「リュートゲロットの悪魔的性格から彼の顔を解釈」したというのは、二通りの意味が考えらる。一つは、その悪魔的性格から作り出された顔の形状を考察し、観相学的分析によって「正しく」その悪魔的性格にたどり着くことが出来た、という意味である。もう一つは、観相学的分析の対象者が悪魔的性格を持つ人物だとあらかじめ知った上で、悪魔的性格という結果になるよう顔の分析や解釈を意図的に操作した、という意味である。正しい観相学は前者であるが、先述したラーヴァーターによるリュートゲロットの分析結果の訂正例を鑑みると、ムゼーウスは後者の意味で記述していると思われる。ムゼーウスはリュートゲロットの観相学的分析には問題があることを見抜き、その分析はもはや観相学ではないと風刺しているのである。

さらに、フィリップの台詞には観相学的解釈における「方向性」についても語られている。まずフィリップは、リュートゲロットの顔の解釈には「内から外へ」の方向性があると意見している。観相学において「内」が「外」へと表出するという考えがあることは明らかだが、ここでムゼーウスが指示しているのは、リュートゲロットの「内」を知った上で「外」を解釈しているという間違った方向性である。そしてマルクスの顔の解釈に見られる「外から内へ」という視線の方向性は観相学としては「自然な」ことなのだが、マルクスの相貌の解釈方法を通してムゼーウスが示唆しているのは、観相学に潜む決めつけや過信の危険性である。マルクスの相貌とリュートゲロットの相貌こそ相似しているものの、友人フィリップによれば両者の性質には「いたずら好き」と「犯罪者」という差があり、性質まで一致していたわけではない。それにも関わらず「私」は観相学の分析結果に固執し、フィリップの訴えに耳を傾けようとはしなかった。「私」のように観相学を妄信するのは非常に危険なことである。というのも、リュートゲロットの例にあるように、そこには観察者の恣意的な判断も含まれている可能性があるからである。そしてもちろん、無意識的な解釈の偏りも含まれうる。

先述したように、ラーヴァーターは観相学的分析の対象者に内在する魂の状態を見極めるべく、その行為の妨げになると考えられる一時的な感情を取り払おうと考えた。その点に関して、ムゼーウスはラーヴァーター観相学には大きな問題があることに気付いた。それを詳らかにするのは、『観相学的紀行』においてラーヴァーターとリヒテンベルクの意見

が異なる原因について記述している場面である。

> 今、なぜ断章の中の顔たちは、多くの人々に、とりわけゲッティンゲンの批評家たちに、L の見たこととは全く別のことを頻繁に語りかけてくるのか、ということが私にはあまりに明らかだ。それはすなわち、紳士諸君は同じものを観察するにあたって、ラーヴァーター的な気分でなかったのだ。そしてそこで視点が知らぬ間にずれてしまっている。[……] そのようにしてどの観相学者も、自分自身の観点から、人間の顔を理性の目で観察するのだ。そしてこの観点は、魂の気分が変わるのと同じくらい頻繁にずれるのである。[20]

「ゲッティンゲンの批評家たち」というのは、ゲッティンゲン大学で教授をしていたリヒテンベルクとその周辺の人々のことを示唆している。「L」というのは、「ゲッティンゲンの批評家たち」と相対する立場にあるラーヴァーターを指している。「私」はなぜ二人の観相学の結果が異なるのか考察していたところ、ついにその原因は「観察する二人」自身の魂の状態が異なっていること、即ち「気分」の相違であると突き止めたのだ。この記述の前の段落で、気分によって見るものの印象が変わるということが「私」自身の経験として記述されている。つまりムゼーウスがここで言わんとするのは、見ることの対象物には見る人の魂の状態が投影されるということなのだ。これは重大な問題点である。ラーヴァーターは観相学的分析を行う対象者から一時的な感情の全てを排除しようとしたにもかかわらず、その瞬間の観察者の感情は全くと言って良いほど排除できていなかったのである。現にラーヴァーターによるリュートゲロットの観相学的分析にはラーヴァーター自身の嫌悪感が大きく影響している。ムゼーウスの『観相学的紀行』においては、この発見の伏線となるような話が語られている。ゾフィーの話[21]はその一つで、初め「私」は美しい顔をした娘ゾフィーのことを天使と形容するも、彼女に裏切られた後、その評価は「ヘビのような人相」に変わっている。[22] 天使からヘビというように、その観相学的分析には「私」の「気分」の変化が大きく関わっていることが分かる。

ムゼーウスのこの指摘は、「見る」という行為において、主体と客体という線引きは出来ないという重要な哲学的思想に端を発している。観相学者は、対象となる他者を見ているつもりが、実際のところ自分自身を見ているのである。見方を変えて、自分自身の一時的な感情や、他者に抱く感情を把握するには、一切の感情を取り払った他者を自己の鏡として利用することは効果的と言える。

おわりに

人間の内側と外側の連関を模索する人々にとって「観相学」は一つの手がかりであり、さらに近代初期の謀略溢れる宮廷においては政敵やその奸計を看破するための重要な手段でもあった。[23] しかしその観相学は経験に基づいており、人々は直観によって顔を判断し

ていたために正確さに欠けていた。そうして観相学を体系化する試みが始まり、ラーヴァーターは『観相学断章』を発表したわけだが、そこで提示された観相学は、他の観相学とは一線を画していた。1780年にラーヴァーターと同時代の詩人フリードリヒ・シラーが医学博士論文で身体と精神の共鳴する関係性を学術的に証明しようとするなど[24)]、当時の観相学が身体のメカニズムの解明や身体と精神の相互作用の究明などで論理的に体系化されることが求められる中、ラーヴァーターはそういった精神医学的側面を考慮せず人間の相貌の観察だけを解釈の拠り所とした。そういった独自性の根源は、ラーヴァーターの「見る」ということへの格別なる傾注に他ならない。対象者の雑多な一時的感情を全て取り払うという分析方法は、純粋に「見る」ということを実践しようとした結果生まれたものである。ところがムゼーウスの指摘が示すように、観察者側の感情は完全には排除できていなかった。また肉体的美と精神的美の調和を謳う解釈の仕方も、目に見える外側から目に見えない内側を「見る」という試みに外側と内側を繋ぐ役目を果たすもので、ラーヴァーターにとっては重要で筋の通った考え方であったのだが、リヒテンベルクやムゼーウスは、そういった分析方法や解釈方法を荒唐無稽だと指摘した。しかし彼らは、こういった種々の問題点から批判をしつつも、観相学そのものは評価している。『観相学断章』は、様々な間違いや偏りを含んではいるものの[25)]、多くの人々に観相学への関心を抱かせた点で、非常に重要な作品なのである。

注

1）本稿の引用は主として1775-78年の第1版にもとづくが、場合によっては1783年の改訂版から引用することもある。

2）観相学 Physiognomik の語源は、ギリシャ語で「自然」を指す *φύσις* と「判断する人」を指す *γνώμων* から成る *φυσιογνωμία* あるいは *φυσιογνωμονία* であり、キケロ（前106-前43）によって physiognomon とラテン語に置き換えられた後、14世紀になってラテン語からドイツ語に持ち込まれた。そして現在「観相学」と訳される Physiognomik という言葉が定着しはじめたのは18世紀になってからである。こうしたコンテクストで観相学を論じた研究として、以下を参照。浜本隆志、柏木治、森貴史編著『ヨーロッパ人相学　顔が語る西洋文化史』白水社、2018年。

3）古代ギリシャのアリストテレスから16世紀のジャン・バッティスタ・デッラ・ポルタまでの観相学は、動物との顔の比較や四体液説、表情の変化等をもとにして他者の性格を解釈してきた。しかしラーヴァーターが観相学的分析の主たる材料としたのは、表情にほとんど左右されない横顔の輪郭線である。ラーヴァーターの『観相学断章』には、それまでの動物学的要素も医学的理由付けもなく、論理的体系が構築されぬままに横顔の輪郭線やシルエットの観察と独自の判定や解釈が展開されている。こういった点でラーヴァーターの観相学は、他の観相学とは一線を画していると言える（vgl. Alexander Košenina: *Literarische Anthropologie. Die*

Neuentdeckung des Menschen, Berlin 2008, S. 131-145)。

4）その意味で、ラーヴァーターにおける観相学的観察は、人間の顔の徹底的な抽象化を目指していたといえる。この抽象化のために必須の手法が、すなわちシルエットなのである。ラーヴァーター自身は次のように書いている ──「一つの影絵には一本の線しかない；いかなる動きも、いかなる光も、いかなる色も、いかなるでっぱりもくぼみもない；目も、耳もなく ── 鼻の穴も、頬もない ── ただ唇の非常に小さな一部分があるだけ ── それにもかかわらず、その影絵はなんと決定的に意義深いことか！」(*Physiognomische Fragmente*, 2. Versuch, S. 90)。ラーヴァーターは、シルエットの縦線をさらに9層に分割し、その各部に表れる特徴から性格を解読することを試みた（ebd., S. 96f.)。

5）ラーヴァーターは『観相学断章』の前に論文『観相学について』(*Von der Physiognomik*, 1772）を出版しており、すでに観相学への関心は高まっていた。当初ラーヴァーター観相学に賛成の立場をとっていた文豪ゲーテは『観相学断章』の出版に協力しており（石田三千雄「ラーヴァーター観相学の構想とその問題点」『人間社会文化研究』第18巻、徳島大学総合科学部、2010年)、ラーヴァーターが分析に多用した「シルエット」への高い関心から友人にシルエットを要求したり、著書『若きウェルテルの悩み』では主人公ウェルテルが想い人ロッテの肖像画に失敗した後にシルエットを完成させて満足したという記述を入れたりしていたことからも、ラーヴァーター観相学に好意的であったことが分かる（vgl. Košenina(s. Anm. 3), S. 133)。しかし後に思想の違いからラーヴァーターと距離を置くようになった（ゲーテ『ゲーテ全集18　書簡編』小牧健夫他編集、人文書院、1928年、275-276頁)。

6）観相学論争の文脈でムゼーウスに注目した先行研究は、管見の及ぶ限り存在しない。

7）Georg Christoph Lichtenberg: *Über Physiognomik; wider die Physiognomen. Zu Beförderung der Menschenliebe und Menschenkenntniß.* Aufl. 2. Göttingen 1778, S. 23ff.

8）Ebd., S. 73f.

9）Ebd., S. 75f.

10）Johann Karl August Musäus: *Physiognomische Reisen: voran ein physiognomisch Tagebuch.* Aufl. 4. Altenburg 1788, S. 86f.「金星の衛星」は17世紀から何度も観測が試みられており、ムゼーウスが生きていた18世紀にも、これを発見することは天文学者の憧れ、喜びであった。

11）Ebd., S. 87.

12）この引用は、『観相学断章』の第二版による。Johann Caspar Lavater: *Physiognomische Fragmente, zur Beförderung der Menschen- kenntniß und Menschenliebe.* Bd. 1. Winterthur 1783, S. 175-208.

13）Ebd., S. 184. „Tugend verschönert; Laster macht häßlich“

14）Ebd., S. 1-5.

15）Ebd., S. 201. „Hat doch Gott der Schönheit des menschlichen Angesichts und der men-

schelichen Gestalt eine so hohe Kraft auf das menschliche Herz gegeben!“

16）『観相学断章』第二巻の194頁と195頁の間の絵で、頁数はふられていない。

17）Johann Caspar Lavater: *Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntniß und Menschenliebe.* Zweyter Versuch. Leipzig und Winterthur 1776, S. 194f.

18）Georg Christoph Lichtenberg: *Über Physiognomik; wider die Physiognomen. Zu Beförderung der Menschenliebe und Menschenkenntniß*. Aufl. 2. Göttingen 1778, S. 36.

19）J.K.A. Musäus: *Physiognomische Reisen*. S. 26.

20）Ebd., S. 88.

21）Ebd., S. 68-76.

22）Ebd., S. 112.

23）Vgl. Košenina（s. Anm. 3）, S. 140.

24）Ebd., S. 134f.　シラーはこの医学博士論文でラーヴァーターにも言及し、ラーヴァーター観相学への批判的な見解を次のように明らかにしている──「例えば鼻、目、口、耳、その他諸々の形と大きさ、髪の色や首の高さ等々の身体的部位の観相学なるものは、もしかするとまったくありえないというわけではないかもしれない。だがおそらくそう簡単に明らかになるというものでもあるまい。ラーファーターがさらに十冊もの四つ折りを上梓し、熱烈に語ることになろうとも。外形は自然の気まぐれな戯れである。（中略）これらの諸外形を分類しようとする者はリンネよりも無謀であろうし、目の前に現れる原型のおもしろく途方もない多様性にのめり込むあまり、自分自身もその原型の一つであるということを見落としていないか注意してもよいであろう。」（長尾亮太朗・髙村俊典・橋本佳奈・池田奈央訳・武田利勝監訳「人間の動物的本性の精神的本性との連関についての試論」『九州ドイツ文学』第31号、2017年、25頁）。

25）リヒテンベルクとムゼーウスの視点からはこのように判断されるが、今後ラーヴァーター観相学をより綿密に研究したうえで彼らの批判が妥当であるかという考察も加え、ラーヴァーター観相学とその賛否についてより詳細に論じる予定である。

„Tugend verschönert; Laster macht häßlich“

—Lavaters *Physiognomik* und ihre zeitgenössischen Kritiker J. K. A. Musäus und G. C. Lichtenberg—

Kana HASHIMOTO

Im 18. Jahrhundert führten die *Physiognomische Fragmente, zur Beförderung der Menschenkenntniß und Menschenliebe* (1775-1778) von Johann Kaspar Lavater (1741-1801) einen physiognomische Streit herbei, an dem viele Prominente teilnahmen unter anderem Goethe, Herder, Lichtenberg, Musäus. Der Streit entbrannte um die Richtigkeit der Beobachtungsmethode sowie deren Deutung. Lavater benutzte Profilskizzen und Silhouetten für seineer physiognomischen Beobachtungen, um alle emotionalen Ausdrücke des Gesichtes unbeachtet lassen zu können. Er betrachtete das emotionslose Gesicht als Ausdruck für den Naturzustand der Seele. Viele Kritiker wiedersprachen diesen Punkten, vor allem Georg Christoph Lichtenberg (1742-1799). Seine und auch die Kritikpunkte Johann Karl August Musäus' (1735-1787) werden nachfolgend betrachtet, denn dieser kritisierte Lavater von einem eignen Standpunkt, der bislang kaum näher beachtet wurde. In diesem Aufsatz sollen die zentralen Punkte der Kritik an der lavaterischer Physiognomik aus den Blickwinkeln von Lichtenberg und Musäus analysiert werden. Beide haben ihren Ursprung in theologischen Grundsatzfragen, auf die hier aus Platzgründen nicht näher eingegangen werden kann.

Lichtenberg kritisiert Lavaters Beobachtungsweise in *Über Physiognomik; wider die Physiognomen. Zu Beförderung der Menschenliebe und Menschenkenntniß* (1778) und tritt zugleich für die Pathognomik ein, in der man Emotion und Mimik wichtig nimmt. Lichtenberg hält die festen Teile des Körpers, auf die Lavater Gewicht legt, für lügenhaft und behauptet die Verlässlichkeit der Pathognomik; „Die pathognomischen Abänderungen in einem Gesicht sind eine Sprache für das Augen, in welcher man, wie der gröste Physiologe sagt, nicht lügen kan.“

Auch Musäus kritisiert die Art und Weise der Beobachtung. Er nutzt dafür den satirisch gemeinten Ausdruck „Grundphysiognomie“. Diese Grundphysiognomie scheine nur kurz nach der Geburt auf, sie sei der reinste Zustand der Seele und werde vermutlich nach dem Tod wieder auf dem Gesicht der Person erscheinen. Das ist offensichtlich eine maßlose Übertreibung der Methode der lavaterischen Psysiognomik, um deren Absurdität vorzuführen. Lichtenberg und Musäus stellen Lavaters physiognomische Beobachtungsweise infrage. Man könne das Innere nicht erfassen, wenn man die Verbindung zwischen Emotion und Miene ausschließt.

Es gibt eine weitere Gemeinsamkeit beider Kritiken gegen die lavaterische Physiognomik. Das ist die Ablehnung der Verbindung der körperlichen Schönheit mit der geistigen Schönheit. Lavater schreibt, „Tugend verschönert; Laster macht häßlich“. Als Christ kommt die urspüngliche Schönheit (von Gesicht, Körper und Herz) direkt von Gott, auch im Sinn von *imago dei*. Lavater behauptet damit die Harmonie von Körper und Geist. Als ein Beispiel für eine lasterhafte Person nennt er Rüdgerodt. Lavater konnte zwar nicht aus Rüdgerodts Silhouette seine Grausamkeit ablesen, sondern

erst aus seiner Profilskizze den Verbrecher erkennen, aber er beurteilte Rüdgerodts äußere Hässlichkeit aus dessen Verbrechen. Im Gegensatz zu Lavater vertritt Lichtenberg die These, dass der Körper keinen Einfluss auf die Seele hat, und kritisiert die Gleichwertigkeit von Körper und Seele in der Physiognomik. Musäus stellt diese behauptete Harmonie ebenso in Frage und bezieht sich auf das Urteil über Rüdgerodts Physiognomie, um dessen willkürliche Veränderung zu markieren. Er zeigt hier einen Bruch in Lavaters Physiognomik. Ferner erwähnte Musäus den Unterschied bei der Analyse der Physiognomien zwischen Lavater und Lichtenberg, und behauptete, dass die Ursache des Unterschieds in deren jeweiliger „Stimmung“ liege. Nach Ansicht des Erzählers der *Physiognomischen Reisen* spiegelt sich in der Betrachtung des Objekts die Seele des Beobachters. Hier zeigt sich der philosophische Grundgedanke, dass man beim Sehen das Subjekt nicht vom Objekt unterscheiden kann. Physiognomen sehen sich selbst in der emotionslosen Physiognomie der anderen Person.

Lavater entwickelte seine physiognomische Methode, um eine seiner Ansicht nach reine Beobachtung der Physiognomie zu ermöglichen. Die Verbindung des Äußeren und Inneren des Menschen als ursprünglicher Schöpfung Gottes entstammt seinen theologischen Ansichten und sind zentral für seine physiognomische Deutungsmethode. Aber Lichtenberg und Musäus fanden genau darin deren Probleme und logischen Brüche. Die lavaterische Physiognomik wurde vielseitig und zahlreich kritisiert, denoch erschien sie vielen interessant und übten großen Einfluss aus. Daher sind die *Physiognomischen Fragmente* Lavaters bis heute für die Forschung von Bedeutung.